

## 比較民俗研究の意義

伊藤清司<sup>※</sup>

とくに日本民俗学の領域でそうであったが、従来しばしば「固有」という表現が使われ、かつその「固有」文化や民俗が追求されてきた。ただし、この語の意味するものが、一定の空間と時間の裡で伝承されてきたことによって形成された当該地域の特色ある文化ないし民俗ということであるならばもとより異論はないが、そうではなく、もし当該地域に独自に発生し、その地に長く伝えられてきた文化または民俗という意味ならば、いささか問題があろう。後者のような意味での純粋な「固有」文化や民俗は実際には存在しない、あってもそれはごく限られたものであったと考えられるからである。つまり、他地域から隔絶し、現在もそして過去においてもまったく他と接触をもたない社会は現在この地球上に存在しない。しいて挙げればすでに絶滅したが、かつてのタスマニア島民の社会などはそれに近かったであろうか。すでに半世紀も前のことだが、文化人類学者 Ralph Linton がこのことに関して、もし人間集団が互いに他からの影響を受けることなく自力のみで生活を送ったと仮定するならば、人類社会は現在でも旧石器時代の段階をはるかに越えることができたか疑わしい、という意味のことを述べているが、考古学者は旧石器時代においてすら相当の遠距離間に文化交流の痕跡が認められることを報じている。つまり、人類の文化、とりわけ民俗学の対象とされる高文化は、程度の差はあるにしろ、他の文化の影響を受けなかったものはあり得ない。それが直接人間の移動によったものか、間接的に人びとの手または口を経由したものか、または文字記録によってもたらされたものか、そのいちいちについて具体的に実証することは至難であろうが、「固有」な文化や民俗とされているもので、外来文化とまったく無縁なものは、まずは存在しなかったのではないかと私は考えている。

このことは日本の場合でももちろん変ろうはずはない。むしろ、この点はいっそう際立っているようにすら思われる。その意味で日本の民俗文化をキャベツのような葉菜に譬えることができる。結球している葉の一枚一枚はそれぞれ近隣地域のいずれかの民俗文化と共通性をもつ、つまり極言すれば、それぞれ他地域に出自をもつ多くの葉の結球したそのものが日本民俗文化なのである。中には他に類似するものがない葉、独特だと思われる葉があるとしても、それは隣接地域に同系の文化の存在することにわれわれがまだ無知であるか、さもなければ、たまたまそれがいまだ発見されていないに過ぎないか、そのいずれかの可能性がないとはいえない。最近の日本でもつぎつぎにおこる考古学上の新発見が世間を驚かしているが、隣接諸国、なかんづく中国大陸では予想だにしない埋もれた文化の発掘報告が続出し、われわれのもつ古代文化像をつぎつぎ変

---

※杏林大学外国語学部教授・慶応大学名誉教授

えている。同じような現象は民俗学の領域でも見られ、長い間埋もれていた民俗文化が最近各地で陽の目を見つつある。

これまで日本で生まれ、日本の「固有」とばかり考えられてきた民俗文化の多くは、タツノオトシゴの出産に譬えられるのではないかと、私は考えている。つまり、世間ではタツノオトシゴは雄の腹から生まれるといわれてきた。もちろん、それは錯覚で、卵を産むのはいうまでもなく雌である。雄の腹袋に産み落とされた卵がやがて孵化してその中から仔が誕生するのが「雄が産む」とされることの真相である。これとよく似た錯覚は日本の民俗事象の中にも少なくない。たとえば、「まろうど神」や「田遊び」などの信仰や儀礼、あるいは「嫁殺し田」や「斎藤別当実盛」などの伝説はこれまで日本「固有」の民俗や民間説話であるかのように考えられがちであった。しかしそれらの出自が海外にあったことは、今では疑う余地がなくなった。国外から伝来したこれらの信仰儀礼や民間説話が日本の土壌に移植され、やがて独特な花を咲かせ実を結んだのが日本の「固有」な民俗文化とされているものの実相であったのではなからうか。

他民族、他地域から受けた文化的影響の内容を刺激伝播あるいは着想伝播といわれるものまで含めて想定するならば、日本民俗文化をキャベツに譬える葉菜説はいよいよ確かなものとなるように私には思われる。くり返すことになるが、日本の民俗文化はそれぞれ海外のいずれかの民俗文化に源流をもつ無数の葉が日本という地理的歴史的環境の中で結球して形成され、成長し続けてきた文化である。その一枚一枚の葉には稲作農耕文化・漢字文化・仏教文化などの大規模な文化複合や鉄器文化・養蚕のようなこれらにつく規模の文化複合から、衣食住さらに単なる嗜好品に過ぎない多数のシンプルな文化要素まで各種各様の関連する民俗文化があり、それらが累積し機能しあって独特な日本民俗文化を形成してきたのである。「固有」という言葉はむしろその結合の仕組みそのものの個性を指す形容としてふさわしい表現であるというべきであろう。もとより人びとの創造力をまったく無視するものではない。また伝来文化の受容と展開の過程で派生する文化やイノベーション、つまり、「類似の中の差異」の生じることももちろん否定しない。しかし、はじめに敢えて強調したように、逆に文字どおりの「固有」をそれほど過大評価すべきではない。このことは大和民族それ自体の形成に似ている。弥生文化期前後以降に先住民族と各隣接地からの渡来民との融合によって大和民族が形成されたが、その核となった先住民自身もその祖先は渡来民であったはずで、決して日本列島内に起源したのではない。先住が渡来かは相対的なちがいであって、彼らが日本列島へ移り住んだ時期の先後早晚の相違にすぎない。どのような時期に、どのような系統のどれだけの数の人びとが、どのような経路を辿って日本列島に渡来し、その自然的環境にどう適応しながら、どのように混合したか、その融合のメカニズムが大和民族と称する特定の民族を生み出したのである。

民族の場合も民俗文化の場合も、その「固有」性といわれるものの本質は、敢えて極言するならば、それぞれを構成する諸要素の組合せとその仕組みそのものに深く関わっている。大規模な文化複合からシンプルな文化要素に至るまでの結合のメカニズムが当該地域の特色ある民俗文化を形成する。大小さまざまな文化領域・文化圏はそのメカニズムの共有性の内実に関係する。

つまり、大規模な複合文化を共通にもつ空間が大文化圏を、その内部でより次元の低い文化を共有する地域が中・小文化圏を形づくる。

民俗文化は、たとえていえば染色体の数等のちがいによって生物体の形質に変化が生じる現象と似ているといえるのかも知れない。ただし、民俗文化形成のメカニズムはきわめて複雑である。すべての外来文化は根づき、結球するとは限らないし、また受容同化の過程で普通変容変質が生起する。逆説的にいえば、外来文化はこのような現象がおこることによってはじめて根づき結球するのである。したがって、わが国の民俗文化が外来の文化諸要素の結合によって形成されているとはいっても、相似形的類似の民俗文化が海外に探し当てられるなどということはもちろんあり得ない。ごく平易な事例を挙げるならば、わが国の昔話「カチカチ山」がその一つである。中国大陸や朝鮮半島に流布する獰猛な虎に対するトリックスターとしての野兎の痛快な欺瞞譚が、虎の棲息しない日本列島に移植されて、狡猾な狸やむじなを退治する兎の仇討ち噺となって流行した。登場者の変化ばかりか説話の趣旨もまた変質した。

日本民俗学の今後の進むべき重要な道の一つは東アジアとの比較研究にある。この地域は日本と地理的歴史的に接続し、漢字・仏教・儒教・稲作その他を共有する一大文化圏に属し、多種の次元の文化にも共通性が多く、今後さらに同根文化の発見の進むことが期待される。ところで、柳田国男が日本民俗学をおこした当初の目的とそのために採った研究方法については今改めて提言するまでもないが、海外との比較をきびしく抑制したのはそれなりの理由があったのであった。当時、国の内外に比較研究を進めるだけの客観的状況が醸成しておらず、その中で平板にして安直な比較は却って将来の学問のためマイナスであるとみたからで、比較研究そのものの必要は柳田自身十分に承知しているはずである。そのことは、尨大な論文の行間の随所に看取できるし、未定稿「比較民俗学の問題」などによっても理解される。それにも拘らず「一国民俗学」を声高に主張し続けたのは、急激な近代化＝西欧化の波に日本の伝統文化が消滅していく事態を眼のあたりにして危機意識を昂め、早急な調査と資料の集積を焦眉の急と心がけたためでもあった。しかし、当時のその「妥当な」目的と研究方法も今にして誤謬がなかったわけではない。「一国民俗学」は日本民俗文化の独自性・固有性を強調する傾向を助長し、その結果、世界でもまれな「一民族・一文化・一国家」的な日本国内において、民族と民族主権主義＝ナショナリズムが前面に浮びあがり、そのため現下の滔々とした国際化時代の潮流に逆って、自ら孤立化へ陥る危険さえ孕んでいる。

他方、眼を海外に転じると、東アジア文化圏の国々では急激な近代化あるいはラジカルな社会変革の裡にそれぞれの伝統文化がかつての日本のそれ以上のスピードで消滅に向かいつつある。可及的に早急な調査と資料の蓄積が望まれる所以であり、現に対応策が講じられつつある。中国でもすでに民俗学的調査研究がそれなりのスピードで進捗しはじめており、口承文芸学の領域では市県レベルの資料蓄積が全国規模で行われている。さらに促進をはかるため日本をはじめ世界各国との連繋にも努めつつある。1991年3月、北京大学日本研究センター主催の「中日民俗比較

学術討論会」もそうした試みの一つであるが、とくに同一文化圏に属する日本の民俗学研究の成果は中国側に少なからざる刺激を与えることが期待される。十数年前、貴州訪問の折、私が民俗誌『南風』の編集者にこの地方における仮面文化の存否を訊ね、もし可能なら仮面特集号の編集をお願いしたことがある。当時は貴州省に限らず、仮面研究の動きはほとんど聞かれなかった。それが今日では各地で舞文化研究が盛行し、国際学会も開催され、仮面関係の著述が続出しているのが現状である。こうした盛況は中国民俗学の進展に伴って生じるべくして起ったものであるが、海外の研究動向や局外者の発言も時には示唆を与えることが少なくないだろう。

中国をはじめ隣接国の民俗学が日本の民俗学界に与える影響もまた少なくない。日本の「固有」とばかり考えていた民俗文化が、隣接地域に存在することが確認されることによって、再吟味を余儀なくされる事例がしばしば生じている。短絡した平板な比較研究にはもとより慎重であるべきであろうが、以前とちがって比較資料の量も相当に増加し、質もまた向上している。われわれはすでに「差異の中の類似」に関心を寄せるべき時期にきている。そしてその「差異の中の類似」の探究と併せてさらに「類似の中の差異」を追求することによって、日本民俗学研究はより深化することが期待できる。日本民俗学の進むべき新しい有効な道はこうした比較民俗学的方法にある。そしてこれによって、さらに、ややもすれば日本民俗学の陥入りがちであった「危険なナショナリズム」を克服し、共通性と個性性とを認識し合い連体感覚と相互尊重に立脚した文化的共生の時代へと進むことが期待されるのである。民俗学は国際化時代に即応できる実利の学ではない、としても、決して無用の虚学ではない。国際化とは畢竟人間関係にあり、相互理解にある。それにはなによりもまず文化を共有する隣接国家・民族の間から進めることが好ましい。そのため比較民俗学はもっとも根底的にして肝要な科学である。こうした観点からいっても比較研究は二重の意味で日本民俗学の踏み進むべき新しい方向であるというべきであろう。

#### 新刊紹介

覃光広等編著・伊藤清司監訳・王汝欄、林雅子訳

#### 『中国少数民族の信仰と習俗』(上)(下)

『中国少数民族宗教概覧』が翻訳出版された。漢族を除いた55の少数民族の宗教信仰の実情が簡にして要を得て纏められている。中央民族学院創立30周年を記念して若手の五人の研究者が1980年に計画し、1982年に上下の二冊本として纏められ、推敲を重ねた上、1988年に公刊されたものである。唯物史観を背景にした公式的な記述も目に着くが監訳者の伊藤教授が言われるようにわが国の伝統的な信仰や風習などとの比較研究の上にも多くの知見を提供してくれる。

欧米人の名前やキリスト教、ラマ教、イスラム教関係の漢字音訳と言語の比定に苦労されたところがあるが、本当に辛苦了と思うのである。各民族のシャーマニズムの記述、また蒙古族のオボはチベットのマニ堆に起源するなど個別に重要な問題がさらりと書かれ、その典拠を知りたくなるなど概論書として紙数に制約されながらも内容豊富な書である。(佐野賢治)

1993.3刊 B6判 748頁 第一書房 各4500円